

## 〔調査報告〕

# アリゾナ州フェニックス市およびカリフォルニア州 サンディエゴ市におけるスポーツ産業展開の一端 —スポーツ社会専攻短期留学プログラム開発を 目的とした調査報告—

漆原 良\*

## 1. はじめに

現在、スポーツ社会専攻では、2011年度の開講を目指しアメリカへの短期留学プログラムの開発を進めている。

近年、日本国内において、スポーツ教学に関わる学部、学科の設置が続いている。その中には、従来の体育学部や教育学部とは異なり、スポーツマネジメントや健康産業をカリキュラムの中心に据えるところもあり、スポーツを中心としつつも多様な人材を育てようとする試みがなされているようである。しかしながら、一方で国内のスポーツに直接的に関わる雇用は、量、職種ともに限られているのが現状であると言えよう。この背景には、日本においては未だ市民がスポーツ活動にお金を投じる意識も低く、スポーツに関連する産業は発展途上であり、これに関わる専門的な能力を持った職種が確立していないといったことが考えられる。

スポーツ社会専攻に在籍する学生を対象に行

ったアンケート調査では、卒業後にスポーツに関連する仕事に就きたいと答える学生は多いもののその詳細については、考えていないか、考えていたとしてもほとんどの者が大手スポーツメーカーやプロスポーツチーム・リーグといった華のある世界しか挙げられない。また、関心のある研究テーマについて尋ねると、自身の経験を元にした個人の興味、関心の域を出ない場合も多く、卒業後の進路にうまくつなげられない者も多いようである。

産業社会学部の一専攻であるスポーツ社会専攻としては、学生たちにスポーツに関する問題を通して現代社会を考え、広く社会の中でスポーツをマネジメントできる力や余暇の新しい可能性を見いだす力を身につけてもらいたい。そのためには、スポーツが社会や市民生活とより密接に結びつき、産業としても様々な展開を見せているアメリカ合衆国において、スポーツの持つ多様性、可能性を実際に見、聞き、感じる事が非常に有効ではないかと考えた。

そこで、国際化拠点整備事業（グローバル30）からの予算補助を受け、2010年2月および2010年9月と2度に渡り、アメリカ合衆国カリ

\*立命館大学産業社会学部准教授

フォルニア州ロサンゼルス市、サンディエゴ市、アリゾナ州フェニックス市、ニューヨーク州ニューヨーク市を訪問し、この短期留学プログラムに相応しいコンテンツの開発に努めてきた。その過程において、興味深いスポーツ関連施設等を訪れることができた。ここでは、特に短期留学プログラムの柱に位置づけられるアリゾナ州フェニックス市近郊におけるスポーツを中心とした都市開発およびカリフォルニア州サンディエゴ市で展開されるエコツーリズムに関する視察の成果についてスポーツ関連施設の紹介という形で報告したい。

## 2. アリゾナ州フェニックス市

### 2-1. アリゾナ州フェニックス市の概要

アリゾナ州は、1800年代中期にはメキシコの手に渡る時期もあったものの、1912年2月14日に、アメリカ合衆国48番目の州となり、現在ではアメリカ南西部の中心的な州としての役割を果たしている。州の面積は、日本の国土面積よりやや小さい約294,313km<sup>2</sup>で、そこに約650万人が生活をしている（2008年時）。1990年から2000年の10年間に40%というアメリカ合衆国内でも最速・最大級の人口増加率を記録、その後も2000年から2006年にも23%という大きな増加率を示している。

産業面で言えばインテルやモトローラ、ボーイングといった世界的なエレクトロニクス分野の企業がその主要拠点を置いており、同分野のアメリカ国内での中心となっている。また、世界的にも有名な Mayo Clinic の支部を中心に近年はバイオ産業にも力を入れているようである。これらの産業の発達も著しいが、州で最も大きな産業は観光であり、世界的にも有名な観

光地であるグランドキャニオンを中心に豊富な観光資源、年間平均気温が22℃、快晴日数が年間300日を越える快適な気候を背景に2008年一年間だけで3700万人の観光客がアリゾナ州を訪れている。

### 2-2. グレーターフェニックスの概要

アリゾナ州の州都は、フェニックス市であるが、実際には、その周辺の砂漠の中に開拓、開発されたグレンデール市、スコッツデール市、テンピ市なども含めてグレーターフェニックス (Greater Phoenix) として一つの都市地域として認識されている。この地域には約380万人が暮らしているが、2006年までの10年間で人口増加率44%を記録するほど驚異的な増加をみせ、現在では全米でも5位になるほど多くの人口を抱える地域となった。

もともと、リゾート地としても知られているが、特にゴルフリゾートとしては全米屈指の地域であり、大小様々なゴルフコースが存在している。アリゾナ州観光局によれば州内に約300のゴルフコースがあり、フェニックスだけでもその約半数が存在しているとされる。グレーターフェニックスの一角を担うスコッツデールでは、4大トーナメントの一つでもある全米プロゴルフ選手権もよく開催されている。

また、アメリカ4大プロスポーツのチーム全ての本拠地となっていることでも知られている。つまり、アメリカ最大のアメリカンフットボールリーグである National Football League (NFL) に所属するアリゾナ・カージナルス、プロ野球リーグである Major League Baseball (MLB) に所属するアリゾナ・ダイヤモンドバックス、北米プロバスケットボールリーグである National Basketball Association (NBA) に所

属のフェニックス・サンズ、北米のプロアイスホッケーリーグである National Hockey League (NHL) に所属のフェニックス・コヨーテズである。

### 2-3. グレンデール市のスポーツ誘致成果

上述したように、グレートフェニックスにはアメリカにおける4大プロスポーツチームが集まっているが、興味深いのは、これらのチームが元々この地を発祥としているわけではなく、多くは移転してきたチームということである。そして、それらはグレートフェニックスの中でもグレンデール市に集まっている。

NHL のフェニックス・コヨーテズは、1996年にカナダのウィニペグ市からフェニックス市へ移転し、2003年に同じグレートフェニックス内にあるグレンデール市へ移転した。NFL のアリゾナ・カーディナルスは、1988年にセントルイス市からアリゾナ州テンピ市へ移転し、2006年に同じグレートフェニックス内のグレンデール市へ移転した。

また、この地は、プロスポーツの本拠地としてだけでなく、いわゆるキャンプ地としての利用も多く見られる。MLB に所属するチームは全米で30チームに及ぶが、春季キャンプにあたる Spring Training は、フロリダ州かアリゾナ州のいずれかで行われている。かつてはフロリダ州の人气が高く、より多くのチームがフロリダ州での Spring Training を実施していたが、現在は半数の15チームがアリゾナ州で実施しており、そのうち13チームがグレートフェニックスで、2チームがフェニックス市から200km 近く離れたツーソン市で実施している。その理由には、西海岸のチームであれば東側にあるフロリダ州よりも近く、ファンが訪れやすいことも

あるが、何よりも州や市といった自治体を中心となる大規模な施設を準備したことが挙げられる。

ロサンゼルス・ドジャースは2009年から、それまで50年あまりにわたり Spring Training を実施してきたフロリダ州ペロビーチ市のドジャータウンを離れ、グレンデール市で行うこととなった。ここでは、Camelback Ranch 球場(収容数10000人)を中心とした複合スポーツ・コンプレックスの建設が大きな理由だったと考えられている。この建設費用は、8000万ドルが費やされたとみられているが、そのうち3分の2は州が負担した。アリゾナ州では、Spring Training を実施するために州内に集まったチームが、オープン戦としてカクタス(サボテンの意味)・リーグと呼ばれる試合を実施する。1試合あたり1万人規模での観客が集まることから、その経済効果は大きく、ドジャースおよび、同時期に同地に移転したシカゴ・ホワイトソックスの2チームの移転に伴う経済効果について、グレンデール市はグレンデール市分のみで年間1900万ドルと見込んでいるようである。

これ以外にも、2007年以降、大学アメリカンフットボールの4大ボウル・ゲームであるフィエスタボウルの開催、2008年には全米一のスポーツイベントとも言われるNFL スーパーボウルを開催するなど多くのスポーツイベントの招致に成功している。

これらの成功は、単にゲームに会場するファンによる経済効果にとどまらず雇用創出や、市、州の認知度を上げることにも大きく貢献している。つまり、市にとっては直接的な収入増だけでなく、非常に幅広く大きな恩恵を受けられることになっているのである。

### 3. フェニックス近郊のスポーツ施設の紹介

ここでは、前章で紹介したアリゾナ州、特にグレーターフェニックスにおけるスポーツを中心とした都市開発の一端を表す施設を紹介する。

#### 3-1. University of Phoenix Stadium

グレンデール市郊外に位置するNFL所属のアリゾナ・カーディナルスの本拠地、フィエスタボウルの会場として使用されている多目的スタジアム（図1）。63400席（72200席まで拡張可能）を持ち、2006年8月にオープンした。その後、上述の目的以外にも、アメリカンフットボールの大学全米一を決めるBCS National Championship やサッカーアメリカ代表の試合、Rolling Stones のコンサートも行われている。

「University of Phoenix」は、フェニックス市に本部を持つアメリカの社会人対象のインターネット大学の最大手であり、ネーミングライツの獲得によりスタジアムの名称となっている。また、ゲート毎にもネーミングライツの販売が行われており、ゲート毎に異なる名称がついている（図2）。

公共交通機関が発達していない（フェニックスのダウンタウンからバスで1時間以上かかる）ためにスタジアム周辺には、都市部からの多くの客を迎え入れられるよう広大な駐車場（図3）を整備するとともに、練習場や市民も使用できる施設として天然芝のフットボール場も複数整備されている（図4）。

#### 3-2. Jobing.com Arena

NHL所属のアリゾナ・コヨーテズの本拠地



図1 University of Phoenix Stadium



図2 ネーミングライツの販売により「Budweiser」の名称がついたゲート



図3 スタジアムの駐車場



図4 駐車場横に整備されたフットボール場



図5 Jobing.com Arena

として使用されている多目的アリーナ (図5)。17000を超える座席を持ち、2003年に完成した。当初はグレンデル・アリーナの名称であったが、2006年、ネーミングライツの販売により求人情報サイトのJobing.comが落札、現在の名称へと変わった。

### 3-3. Westgate City Center

Jobing.com ArenaはUniversity of Phoenix Stadiumの道を挟んだ向かい側に位置している (図6)。さらに、このアリーナの裏側にはショッピングモール、レストラン街、映画館、高級ホテルがあり、スタジアムやアリーナと合わせて、エンターテインメント・コンプレックス「Westgate City Center」として開発された。そ

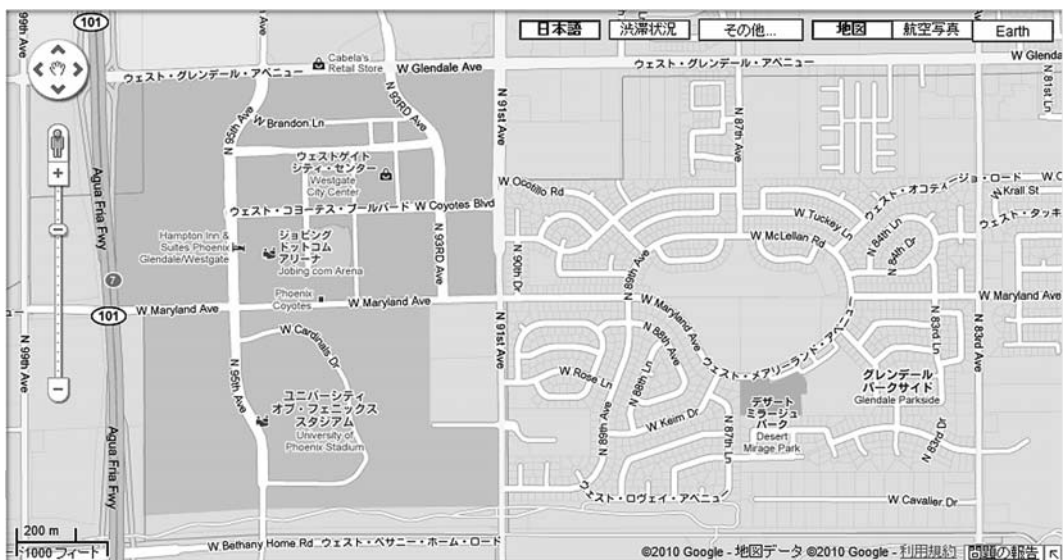


図6 Westgate City Center 付近の地図 (Google Map より)

左下に University of Phoenix Stadium, その上に Jobing.com Arena と Westgate City Center がある。右が住宅街。

の目的は、NFLやNHLの観戦者によってもたらされるスタジアムやアリーナでの収益だけではなく、これらの施設を合わせて利用することによる関連収益の増大である。例えば、夜に試合が行われるのであれば、早くに到着して、無料もしくは格安の駐車場に車を停めて、買い物や映画を楽しんだ後、試合を観戦し、食事まで済ませることができる。つまり、試合観戦だけではなく、休日一日をこの施設で十分楽しむことができ、そのために多くのお金をここで費やすことになるのである。事実、視察時も、試合終了に合わせてモールの広場ではパレードが行われ、観戦を終えた人々がそのパレードを見な

がら、食事を楽しむ姿が多く見られた（図7、8）。この一画にスポーツ施設を中心としたアミューズメントエリアとして人を集める仕組みが作られている一つの現われだと言えるだろう。

これらの施設の隣の区画には新興住宅地が整備されている（図9）。驚かされるのは、この一帯はかつて砂漠で何もないところであったことである。事実、図10はこの一帯まで車で5分ほどの風景を写したものであるが、未だに何もない荒涼とした風景が広がっている。こういった何もない土地に、この10～20年の間にスタジアムやアリーナが建設され、関連施設ができ



図7 パレードを楽しむ人たち



図9 新興住宅地と駐車場への進入を待つ試合観戦に訪れた人たちの車の列



図8 試合終了後多くの人たちがレストラン街へと移動していく



図10 スタジアム近郊では未だ何もない土地も広がっている

人々が集まっているのである。

### 3-4. Chase Field (図11)

MLB に所属するアリゾナ・ダイヤモンドバックスの本拠地として使用されている野球場。1998年にチーム創設とともに建設され、当初命名権を獲得した銀行から「Bank One Ball Park (通称 BOB)」の名称がついていたが、「Bank One」がJPモルガン・チェイス銀行に合併されたのを受けて、2005年「Chase Field」へと名称変更が行われた。

フェニックス市のダウンタウンに位置し、収容人数は約4万9000人である。この球場の特徴



図11 Chase Field



図12 ファン感謝デーのため、多くのファンが楽しむ Chase Field のグラウンド。左端真ん中にプールが見えるが、この時期は使用されていない

は、プールと開閉可能な屋根にある。

ライトスタンドのグラウンド寄りに温水プール (Leslie's Pool Zone) があり (図12)、シーズン中はグループ単位の貸し切り運営が行われ、観客は水着で泳ぎながら試合観戦が可能である。非常に人気が高く翌シーズンまで予約されていることもある。ちなみに、打者が放ったホームランボールがプールに落ちることを「プール・ショット」と呼んでいる。

この球場は、開閉式の屋根を持ちながら天然芝のグラウンドを持つ世界で唯一の球場としても知られている。天然芝を育成していること、ほとんど雨の降ることのない天候であることを考えれば屋根を付けることの意味自体がないように考えられるが、アリゾナ州の気候では夏場は40℃近くになることもあり、照りつける日光や暑さを防ぐ意味でこの屋根が活用されるのである。主に降雨対策としてドーム球場が多く作られている日本とはまったく異なる発想である。この球場の屋根の開閉はおよそ4分程度で行われるが、この開閉自体も一つのイベントとして観戦者の間では楽しまれている。

ライトスタンド上部にはダイニングクラブが、レフトスタンド上部には、日本にも多くの支店を持つレストランチェーンの T.G.I. FRiDAY'S があり (図13)、食事をしながらの観戦も可能である。これとは別に売店も多く存在している。

また、100ドル以上を寄付することによりバースデーメッセージやプロポーズなどのメッセージを電光掲示板に映してもらうことも通常のサービスとして提供されているそうである。

以上のように、球場を単に野球を観る場所としてだけでなく、様々なエンターテインメントを提供する場所として多くの工夫がなされている



図13 Chase Fieldの電光掲示板。左端にレストランも写っている

ことがわかる。これは Chase Field に限ったことではなく、MLB に所属するチームが使用する球場の多くで付加価値をつけることにより客単価を向上し、収益の増加につなげようとする試みが多くなされている。近年、これらの工夫を見習うべくパシフィックリーグの球団を中心に日本のプロ野球チーム関係者も多く見学に訪れているようで、その成果として、最近では日本の球場でも様々なサービスが提供される場所が増えてきているようである。しかしながら、MLB で使用される多くの球場において、使用する球団の比較的自由的な運営、経営が認められ、その収益は球団収入へと結びついているにもかかわらず、日本では球場経営は球団とは別会社となり、こういったファンサービスの提供自体が困難であったり、仮に行ったとしても球団の収益には直結しない例が未だ見られる。そ

の一端は、横浜ベイスターズ身売りの際、球場使用料が問題となったことにも垣間見られる。これも日本とアメリカのスポーツを取り巻く産業構造の大きな違いの一つだと言えるのではないだろうか。

### 3-5. Peoria Sports Complex (図14)

フェニックス市近郊のピオリア市に位置するスポーツ複合施設で、MLB に所属するシアトル・マリナーズとサンディエゴ・パドレスが Spring Training の会場として使用している。比較的街中にあるにもかかわらずメインスタジア



図14 Peoria Sports Complex



図15 Peoria Sports Complexのトレーニングフィールド。立ち並ぶ照明を見るだけでかなり遠方までフィールドが続いていることが確認できる



ムの他、両チーム用のクラブハウス、12面におよぶトレーニングフィールドが確保されている(図15)。

訪れた日はちょうど Spring Training 開始前日であったが、チーム関係者等の姿は見えなかった。一方、この Sports Complex の近隣にも複数のホテルやショッピングモール等があるが、すでにホテルの駐車場には多くの車が停まっており、Spring Training を観に来るファンや取材関係者が多く集まっているようであった。

日本の感覚からすれば、遠方のキャンプ地にまで泊りがけで出向くのは、かなりのプロ野球ファンだと思われるが、ここでは事情が異なる。先にも紹介したとおり、アリゾナ州内ではこの Peoria Sports Complex をはじめフェニックス近郊の9ヶ所、ツーソン市の2ヶ所で計15チームがSpring Training を行っており、これらのチームがカクタス・リーグと呼ばれるオープン戦を繰り広げる。これは毎年3月の一ヶ月間、ほぼ毎日どこかで試合が行われることになり、安いチケットなら10ドル以下、高いものでも20~30ドルで購入可能であり、レギュラーシーズンではあまり見られないような対戦も楽しめる。さらに、トレーニングフィールドの写真からもわかるように、フェンス1枚を隔てたところで選手たちが日々トレーニングを行うため、大リーガーたちを身近で見ることができ、サインなどのファンサービスを受けることも比較的容易である。

このような背景から、多くのファンがフェニックス市を訪れ、数日~1週間程度滞在しメジャーリーグを満喫していくのである。2010年シーズンにおけるその入場者数は、Peoria Sports Complex だけで20万人を超え、カクタス・リーグ全体では約150万人にもおよぶ。そ

の内訳はアリゾナ州在住者が45%、州外からの訪問者が55%を占めており、経済効果は3億ドルを超えると考えられている。

また、旅行としてここを訪れるファンだけではなく、退職後の人生を快適な気候とスポーツ観戦により楽しもうとする人の移住も多く見られ、比較的時や収入に余裕がある人が多く含まれているようである。観戦者の年齢構成で50歳以上が27%を占めること、観戦者全体の45%以上が10万ドル以上の年収を持つことからそれがうかがえる。このことから、施設のスポンサー獲得活動も活発に行われ、ペプシコーラなど大きな企業の広告も数多く見られる。

### 3-6. Athletes Performance (図16)

アメリカ国内で大きな成長を見せている民間のトレーニング施設。1999年、Mark Verstegen氏により設立された。コア・トレーニングを中心としたトレーニングプログラムで日本でもよく知られている。本社は、ここアリゾナ州フェニックス市であり、他にもカリフォルニア州、フロリダ州、テキサス州にも支社を持っている。

この施設は、エリートもしくはプロスポーツ



図16 Athletes Performance 本社

選手を対象に、スポーツトレーニング、栄養指導、理学療法を総合的に提供する場としてはじまり、現在では高校生や一般個人向けのプログラム、アメリカ軍兵士の訓練、インテルのような大企業における社員健康増進事業まで手がけている。プロスポーツ選手であれば、オフシーズンにいわゆる身体のケアや基礎の身体作りを目的として訪れ、その中には数多くのMLB、NBA、NHL、NFL所属選手、プロゴルファーらがいるが、近年松坂大輔選手や五十嵐亮太選手といった日本人選手も多く含まれている（図17）。また、2006年、2010年のサッカーワールド杯に出場したドイツ代表チームのトレーナーを Athletes Performance のスタッフ（日本人）が務めていることもよく知られている。

Athletes Performance で働く日本人トレーナーの Abe 氏によれば、その躍進には、まず Mark Verstegen 氏の考えたトレーニング理論が画期的であったことが挙げられ、それまでアメリカ国内の主流であったいわゆるウエイトトレーニングを中心としたプログラムとは異なり、非常に「動き」を重視したプログラムとなっており、それが筋力増大によるパフォーマンスの向上に限界を感じ始めていたスポーツ界に新しい考えをもたらしたそうである。その一方で、Athletes Performance は、この新しい理論を武器として、それを確実に成長させるマーケティング戦略も持ち合わせており、トレーナーであり経営などの知識が十分ではなかった Mark Verstegen 氏が、スポーツマネジメントの専門家を施設設立当初から招き入れていたことも理由だろうとのことであった。

詳細をうかがうことはできなかったが、そのマーケティング戦略の一つを推測するならば、設立の地にアリゾナ州フェニックス市を選んだ



図17 施設内の休憩スペース。ここでトレーニングをする多くの選手たちのユニフォームが飾られている



図18 トレーニング設備。これ以外にも屋外に人工芝のフィールド、陸上トラック、バスケットコート、ブルペン、プールなどが備えられている

ことである。ここまで述べてきたように、フェニックス市近郊にはアメリカ4大スポーツすべてのチームが存在し、MLBに関していえば多くのチームの Spring Training が行われる地でもある。それ以前に、晴天が多く、温暖、快適でリゾート地も多く、比較的物価の安いことから多くのプロスポーツ選手が自宅ないしはオフシーズンの生活拠点をフェニックス市に持っていると言われている。このため、フェニックス市で優れたトレーニング施設を置くことにより、多くの有名選手に利用してもらうことがで

き、その口コミ等により顧客を拡大していったと考えられる。

これはプロスポーツチームの本拠地やキャンプ地の誘致により周辺の産業も合わせて発展を遂げた一つの例ではないだろうか。

### 3-7. アリゾナ州フェニックス市のまとめ

ここまで、アリゾナ州フェニックス市近郊のスポーツ施設を紹介してきた。大規模なスポーツ施設を整備し、そこにプロスポーツチームを誘致することにより、ファン、観光客が多く訪れてくれるだけでなく、チームや試合を取材するメディアが訪れることにより、街や州の宣伝にも大きな効果があると言えるだろう。さらには、スポーツの持つイメージにより州や街のイメージ向上が図られ、多くの移住者を迎えることにもつながっていると考えられる。これに伴って、さらに関連産業が発展していく。これまでのところは、アリゾナ州で行われているスポーツを中心とした都市開発の施策がよいサイクルを生み出していると言える。

今回紹介したプロスポーツのキャンプ地や球場では、その整備に Arizona Sports & Tourism Authority (AZSTA。アリゾナ州スポーツ観光局) が果たした役割が大きいと言われている。

1990年代以降、アリゾナ州がMLBチームのSpring Trainingの誘致に力を注いでいたが、この中心となったのがAZSTAだそうで、施設整備や用地取得に多額の財政支出を行ったようである。あわせて1990年代後半にはグレンデール市もスポーツを中心とした発展に向けて動き出した。このように州および市の財政支援を受けられる環境が作られ、そこへ新たな施設やファン獲得を考えたプロスポーツチームが移転してくることになり、今日のような環境が作り出さ

れたわけである。

しかし、現在、AZSTAの職員数は削減されてきている。今日のような環境が作り上げられ、その目標が一つの到達点を向かえたことによる整理だとも考えられる。一方、このような大規模なスポーツ施設を維持し、最新の環境へと更新し続けること、移転してきたチームを長く地元で支えていくことは、施設建設やチーム誘致よりも困難なことであると予想され、それを支える組織体制は気になるところである。事実、Spring Training実施地としてライバル関係にあったフロリダ州からアリゾナ州へ移ってきたチームの中には、フロリダ州の施設の老朽化も移転の契機と捉えていたチームもある。

AZSTAの規模縮小について、現在のところ詳細な情報がいないため考察することはできないが、このような政策変更について検討していくことも実習が実現した際の学生たちのよい学習テーマになるのではないだろうか。

## 4. カリフォルニア州サンディエゴ市の概要

カリフォルニア州サンディエゴ市はアメリカの最も南西に位置する都市である。4200平方マイルの面積を持ち、都市部で130万、周辺地域にはさらに300万の人が住んでいる。この人口規模はカリフォルニア州ではロサンゼルス市に次ぐ大きさである。

サンディエゴ市は非常によい気候を持つ都市であり、常夏のような気温ではないが、夏は暑すぎず、冬も比較的暖かであり過ごしやすい気候である。また、110キロに及ぶビーチや湾、砂漠、山岳地帯など変化にとんだ豊かな自然も魅力である。こういった背景から、高級別荘地もあり、旅行者も多い都市である。

このような気候、自然環境を活かした屋外でのスポーツアトラクションやファミリー向けのスポーツレクリエーションもサンディエゴ市の大きな楽しみの一つとして知られている。特に温暖な気候と豊かな海でのサーフィン、ボート、セーリング、スキューバ・ダイビング、シュノーケリングは盛んであり、景色のよいジョギング、ハイキング、サイクリング・コース、ゴルフコースやテニスコートも多く見られる。

## 5. サンディエゴ市のスポーツ施設の紹介

ここでは、カリフォルニア州サンディエゴ市における自然環境を活かしたマリンスポーツに関連する施設を紹介する。

### 5-1. Mission Bay Park

Mission Bay Park は、後述する La Jolla Shores と合わせて、サンディエゴ市の中でもマリンスポーツの盛んな場所である。サンディエゴ市中心部から車で15～20分ほどのサンディエゴ川河口にある湿地帯を人工的に公園化したところで、サンディエゴ市の最も有名な観光地である「Sea World」もここにある。1944年に、地元商工会議所が、観光客を呼び込み、市経済に貢献できるレクリエーションセンターとして開発を進めることを提案し、1940年代後半より整備が進められ、現在の姿へとなっていった。

ビーチ（図19）は監視員もおり、公共のトイレやシャワーもよく整備されているため海水浴を楽しむことはもちろん、ヨットやボートのレンタルもあり、また魚釣りもかなりの場所で許可されているため、ここだけであらゆるマリンスポーツを満喫することができる。

ビーチ周辺に整備された公園には、サイクリ

ングやウォーキングを楽しめる小道だけでなく、子どもたちのプレイエリア、バーベキューサイト、ビーチバレーコート、バスケットコート、ソフトボールグラウンドも整備され、著者が訪れた時には芝生でアメリカンフットボールの練習、キッチン付のイベントスペースでは子どもの誕生日会まで開催されていた（図20）。

豊かなビーチを活かし、人々がそれぞれの時間を楽しむことのできる環境が整備されていると言える。その成果として、公園の集計によれば、現在では年間で1500万人がこのビーチ・公園を訪れている。



図19 Mission Bay ビーチ



図20 公園内のビーチバレーコート

### 5-2. Mission Bay Aquatic Center (図21)

Mission Bay Park の中にあるマリンスポーツ体験施設である。このセンターは1971年に設立され、その特徴は、San Diego State University と The University of California San Diego の Associated Students という2つの大学の学友会により運営されていることである。

ここでは、ウェイクボード、サーフィン、ウォータースキー、カヤッキング、スタンドアップパドルリングなどあらゆるマリンスポーツを体験することができる(図22)が、いずれかの大学の現役在校生なら1時間25ドル～(2人目以降追加料金10ドル/人)、それ以外の人でも40ドル～という比較的安価な費用で楽しむことが



図21 Mission Bay Aquatic Center



図22 センターでレクチャーを受ける人たち

可能になっている。2009年は年間で15000人がマリンスポーツ体験のために利用している。

もう一方で、学生たちがこの施設でインターンシップやアルバイトとして経験を積むことのできる場にもなっていると同時に、San Diego State University の School of Exercise and Nutritional Sciences のマリンスポーツ実習授業の場ともなっており、大学生の教学施設としての機能も有している興味深い施設である。

### 5-3. La Jolla Shores

La Jolla Shores は、サンディエゴ市街から車で30分ほど北に移動したところにあるビーチである(図23)。ビーチにはリゾートホテル、丘陵地帯には立派な一軒家が立ち並び、近隣には風景の美しさを売りにするゴルフコースもいくつか見られるリゾート地である。



図23 La Jolla Shores のビーチ。カヤッキング体験者のための道具が並ぶ



図24 ビーチはツアー参加者で混雑している



図25 「Life Rolls On」の会場

ビーチにはライフセーバーが待機し、水泳エリアとサーフィンエリアが分けられ、公共のトイレやシャワー、芝生の公園には子どものプレイスポットなども整備されている。

近隣に10軒ほど立ち並ぶあるスポーツ体験ショップにいけば、海の景色を楽しむサイクリングやハイキングも多く行われているが、やはりビーチと豊かな海中生物が主な観光資源となっており、サーフィンとシュノーケリング、カヤッキングが多く行われている（図23、図24）。

比較的穏やかな海であることから、サーフィンでは初級者～中級者に人気のあるビーチだが、おだやかなところを利用して近くの崖下の洞窟までいくカヤッキング・ツアーやサンゴ礁を見に行くシュノーケリング・ツアーも人気なのである。また、ビーチの一部には人間の立ち入りが禁止されているエリアがあるが、ここではアザラシが生活しており、特別に作られた通路から観察することも人気がある。

以上のように観光客やサーファーには人気のビーチであり、著者来訪時にも、週末だったこともあり、ビーチには多くのサーファーやカヤッキング・ツアー体験者があふれており、駐車場を探すのに苦労した。



図26 多くのメンバーに囲まれながらサーフィンをする参加者。彼らに支えられて沖へ行き、波に乗って海岸まで戻ってくる

著者来訪時は、たまたまサーフィンエリアで「Life Rolls On」というイベントが行われていた（図25）。これはクリストファー＆ダナ・リーヴ財団の行っているNPO法人活動の一つである。スポーツ中の事故により半身不随になった人がメンバーの力を借りて海に入りサーフィンをするというものである（図26）。

これ自体が、障がいを持ってしまったスポーツ選手にもう一度スポーツに参加できるという喜び（仕組みは十分理解できなかったが、参加者の波の乗り方には得点が付けられて、試合形式がとられている）を与えるものであるが、この活動やこの活動を記録した映像（カメラマン



図27 インタビューを受ける参加者

を何人も準備して、活動風景や参加者へのインタビューを撮影しており(図27)、これを別のイベント会場などで流すのである)を利用して、寄付を募ったり、グッズや食事の販売を通して福祉活動のための収益を確保しているそうである。ちなみに今回著者が購入したTシャツの代金(20ドル)は原価を除いた全ての売り上げが車椅子スポーツの普及や環境整備に使われるとのことであった。

#### 5-4. カリフォルニア州サンディエゴ市のまとめ

今回の視察では、サンディエゴ市の環境資源の特徴の一つであるビーチを中心に行った。いずれのビーチも、多様なニーズに応える環境がよく整備されていることが印象に残った。

特に、初心者に対するマリンスポーツの体験を提供するショップの多さには驚かされた。これらのショップは、今回紹介したマリンスポーツ以外にもホエールウォッチングツアーも商品として扱っている(訪問時は9月。ホエールウォッチングは通常冬期のみ)。いずれも豊かな自然環境をうまく活用し、そこにマリンスポーツを組み込むことにより、体験型のレジャー活

動をサービスとして提供している。これはレクリエーションスポーツを組み込んだいわゆるエコツアーの一つだと言えるだろう。

The International Ecotourism Societyによれば、2004年以降エコツーリズムは急成長を見せており、その市場規模は3746億ドルにものぼるようである。このエコツーリズムが既存のツアー旅行と大きく違う点は、パッケージツアーでは、その収益の多くが旅行代理店に流れるのに対し、エコツーリズムは地域経済への還元効果が大きいためである。これは、そもそもエコツーリズムの定義が「地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらい」としているためである。

Sustainable tourismを専門とするSan Diego State UniversityのJess Ponting氏によれば、サンディエゴ市にはサーフィンを目的に年間80万人が訪れるそうで、サンディエゴが市環境資源やスポーツを活用した観光産業がうまく展開されている一つの表れではないだろうか。

日本でも近年エコツーリズムやグリーンツーリズムが発展してきているようである。日本国内でも特に過疎地と呼ばれるような地域には、非常に豊かな自然が残されている。これは、その自然環境を体験するレクリエーションスポーツやアクションスポーツを楽しむ場が多く残されているとも理解できる。サンディエゴ市のような例がそのまま日本に当てはまるとは言えないが、日本の豊かな環境資源が十分活かされていない現状を考えれば、レクリエーションスポーツ・アクションスポーツをうまく組み込んだエコツアーの開発は、地域経済の活性化、スポーツ産業の発展などいくつかの問題の解決策となりうるのではないだろうか。こういったことも、プログラムが実現した暁には学生たちにゼ

ひ取り組んでもらいたいテーマである。

## 6. まとめ

アリゾナ州フェニックス市およびその近郊ではプロスポーツを中心とした都市開発, カリフォルニア州サンディエゴ市では環境資源を活用したレクリエーションスポーツを中心とした観光産業の現場に関連する施設を紹介してきた。

元々アメリカは、広大な土地や娯楽としてスポーツが定着している文化など日本とは様々な点で異なる背景を持っている。このため、単純にアメリカでの視察例が日本の好例として当てはまることはないであろうし、今回紹介した例も深く観察すれば様々な問題も発見されよう。

しかしながら、今日、スポーツに対して、日本国内で見られる印象に基づいた固定概念に捕らわれていることが多い学生たちにとって、これらの施設、現場に直接触れることは「概念砕き」として貴重な経験になると考えている。また、ここで紹介したようにスポーツは都市開発、環境問題、障がい者問題など社会の様々な側面と結びついている。これはまさに産業社会学部の特徴である学際性あるアプローチが必要とされるところであり、スポーツ社会専攻だけでなく他の専攻の学生たちにとっても有意義なテーマであると言え、産業社会学部の学生たちがここでの経験を活かして大きく成長していつてくれることを期待するものである。

## 7. 謝辞

今回の視察は、視察先のコーディネイトや情報提供をして下さった株式会社サニーサイドア

ップの塚本智香さん(産業社会学部卒業生)、Athlete Dream Management社の三原徹氏、現地の案内をしてくれた同社の野口氏、内藤氏の多大な協力、ならびにグローバル30の予算補助の下に実施された。ここに感謝致します。

## 参考資料

渡辺史敏「グレンデル市が「スポーツ誘致政策」に成功する理由。」『Sport Management Review』Vol. 9, 2008年, pp. 34-37

アリゾナ州日本語ホームページ

<http://homepage2.nifty.com/arizonajapan/index.html>

アリゾナ州駐日観光局公式サイト

<http://www.uswest.tv/arizona/index.html>

アリゾナ州公式サイト

<http://az.gov/>

フェニックス市公式サイト

<http://www.phoenix.gov/>

University of Phoenix Stadium 公式サイト

<http://www.universityofphoenixstadium.com/>

Arizona Cardinals 公式サイト

<http://www.azcardinals.com/>

Jobing.com arena 公式サイト

<http://www.jobingarena.com/>

Phoenix Coyotes 公式サイト

<http://www.phoenixcoyotes.com/>

Google Map

<http://maps.google.co.jp/>

Westgate City Center 公式サイト

<http://www.westgatecitycenter.com/>

Arizona Diamondbacks 公式サイト

<http://arizona.diamondbacks.mlb.com/>

Athlete Dream Management Inc. スタッフブログ

<http://admsportsbiz.blogspot.com/>

<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/admsportsbiz/>

Peoria Sports Complex 公式サイト

<http://www.springtrainingpeoria.com/>

Athletes Performance 公式サイト

<http://www.athletesperformance.com/>



サンディエゴ市公式サイト

<http://www.sandiego.org/>

Mission Bay Park 公式サイト

<http://www.sandiego.gov/park-and-recreation/parks/missionbay/index.shtml>

Mission Bay Aquatic Center 公式サイト

<http://www.mbaquaticcenter.com/>

Life Rolls On 公式サイト

<http://www.liferollson.org/>

The International Ecotourism Society 公式サイト

<http://www.ecotourism.org/>

日本エコツーリズム協会公式サイト

<http://www.ecotourism.gr.jp/>